

佳作

## 父のお店のお客さん

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 山本 宙来

私の父の仕事はラーメン屋です。そこにはよく来てくれる常連さん、家族連れの方、学生など様々な人が来店します。ただ、皆が皆良い人では無く、「不味い」と父に聞こえる声で言う人、「不味くて気分が悪くなったので金を返せ」と言う人などもあります。

僕が中学校二年生の頃、母が看護師で夜勤だったので夜ご飯を部活終わりに直接父の店に食べに行きました。店には家族連れ一グループ、常連三名、普通の客が三名いました。僕がご飯を食べていると後ろから、

「不味すぎる、こんなラーメン食えたもんじゃない！」

と大きな声が聞こえてきました。続けて、

「本当に人間が作ったのか？よくこんなものを出せるな。」

と言いました。とてもひどい言われようで僕はとても冷静ではいられずにレンゲをそのお客さんに投げつけてしまいました。そして、

「そんな事いちいち口に出さなくてもいいじゃないか！」

不味いと思ったならこれから二度と来なければいいだろ！」

と言ってしまった。お客さんも、

「はあ！」

と店内は喧嘩ムードでした。他のお客さんの視線もこっちに向くなか、父は、

「申し訳ありませんでした。」

と言いました。僕には到底理解することができませんでした。頼まれて作ったラーメンを「不味い」と罵倒されたのにもかかわらず頭を下げたことに。

翌日、僕は父に聞きました。聞いた内容はもちろん昨日のこと。僕はどうしても納得することができなかったからです。すると父は、

「正直俺も冷静を保てそうになかったし、本当に殴りそうになった。だけどお前がレンゲを投げたときに本当はいけないことだけどお前に対して怒らなかつた。それはどこかですっきりした自分がいたからだし、その後にお前が言った言葉でもう何も言わなくていいと思つたからだ。謝つたのは今度はそのお客さんにもおしいと思つてもらえるための意気込みとは少し違うけど、そのような感じで謝つた。」

と言っていました。これを聞いたときに僕はまだまだ自分分は子供なんだなあと思えました。大人な父にとっても感動した日でした。

それから僕は高校生になり、他にも何人か同じことを言うお客さんに会ったが何も言わずに無視をしている。僕はその日のことは一生忘れないと思う。そう思っていたが、あの日「不味い」と言ったお客さんがうちに来店した。もしまた来店しても怒らないと決めていたが、顔を見ると怒りが爆発しそうだった。お父さんも気付いていた。だがお客さんは入ってくると最初に父の方に向かって、

「すいませんでした。」

と謝罪をした。僕の怒りはすつと消えた。本当はおいしかったけど仕事のストレスなどでキツくてあんなことを言ってしまった、と話を聞いた。そこで僕は、

「僕もあの日レンゲを投げつけてしまいましたすいませんでした。大切な家族のお店のご飯を不味いと言われたので、後のことは考えずに投げつけてしまいました。」

とそこで和解は成立し、今ではよく来てくれるお店の常連さんになっています。これからお客さんを大切にしていきたい、将来的には父の店を継ぐことも考えています。

なので、その時の感情だけに身を任せずに、冷静になり、もし同じような事を言うてくるような人がいても大人の対応をしようと思う。